

# ティーチャー・トレーニングのためのワークショップ<sup>\*1</sup>

牛 場 大 蔵<sup>\*2</sup>

ここにいう“ティーチャー・トレーニング (TT)”とは、医学教育すなわち医科大学、病院などの教育に携わる医師・医学者と、広く医療・保健関連領域における教育者について、教師 (ティーチャー) としての訓練をすることを意味するが、本書ではとくに医学教育者のための TT について述べる。TT の意義と種類については、1977年までに行われたそのためのワークショップ (WS) とともに、前回の「医学教育白書」(1978年) に記載されている。

TT の実施方法としては従来もっぱら WS 形式がとられてきたが、これはこの形式がもっとも有効であるとの多くの経験に基づいたものである。しかしその細部の方法には種々のものがあり、とくにその期間については2週間以上の長期のものから、1泊2日、あるいは1日間の短期のものまである。いずれにしてもあまり多くない人数で、合宿形式で特定のテーマについて行われるものである。

## 1. WHO 主催の WS (シドニー)

TT の構想を打ち出した WHO (世界保健機関) では、各地域における TT のセンター (地域センター: RTTC) を作り、その地域内の多国間 WS を行っているが、わが国の属する西太平洋地域の RTTC は豪州シドニーにあり、ニューサウスウェルス大学の中に設置されている。その WS は1973年以降ほとんど毎年行われ、1976年までのわが国からの参加者氏名は、WS の時期、テーマとともに、前回の白書に記載されている<sup>\*3</sup>。

以下に1977年—1980年間の WS をあげる。

1978年2月17—24日、(テーマ) Manpower development, (参加者) 西三郎 (公衆衛生院), 下田智久 (厚生省)

1979年2月4—16日 (テーマ) Faculty development, (参加者) 福岡誠之 (京都日赤病院), 高石昌弘 (公衆衛生院)

生院)

1980年2月3—15日、(テーマ) Development of Instructional Materials, (参加者) 杉山武敏 (神戸大学医学部), 西岡和男 (公衆衛生院)

なお、1977年には助産婦のみの WS が行われ、医学教育のためのものはなかった。また1981年2月には Educational Process for Trainers of Primary Health Care Workers というテーマで行われたが、わが国からの参加者はなかった。

## 2. 医学教育者のためのワークショップ

これはわが国で行われている全国的な TT WS であって、1974年以降毎年度1回、すべて裾野市富士教育研修所で催されてきた。第4回 (1977年12月) までの概略は、前回の白書に述べられているが、本書では第1回から第7回 (1980年12月) までをまとめて、やや詳細に記すことにする。

この WS が従来一貫してかかげてきた目的は「医学教育者がより新しい教育、訓練の技法を修得し、効果的な医学教育を行うことにより、今後の医学および医療の充実を図ろうとするもの」であり、参加対象者は「臨床研修指定病院に勤務する医師で、現に臨床研修の指導を行っている者、または医科大学 (大学医学部) に勤務する教員で、現に医学教育に従事している者」とされている。参加者は上記の資格をもつ者が申請し、つねに大学 (文部省) 関係と研修病院 (厚生省) 関係同数ずつが選ばれた。過去7回の WS 事項をまとめて表示すると表1のようになる。

表にみるように、昭和51 (1976) 年度のみは翌年1月であったが、他年度はすべて12月に行われ、期間は7泊8日であったのがしだいに6泊7日となってきた。主催

<sup>\*3</sup> その記載の中につぎの WS が記載されていなかったのを追加する。

1975年6月—20日、(テーマ) General education, (参加者) 小野寺壮吉 (旭川医大), 小沢満 (国立大阪病院)

<sup>\*1</sup> Workshops on Teacher Training.

<sup>\*2</sup> USHIBA, Daizo 国際医学情報センター

表 1 第1～7回医学教育者のためのワークショップ（富士教育研修所）

回	期 日	主 催	後援・協力	テ ー マ	参加者	講 師 (コンサルタント)
1	1974. 12. 14～21 (8日)	厚生省 文部省科研費 総合研究班	WHO	カリキュラム プランニング	(大学) 10 (病院) 10	5 (7*1)
2	1975. 12. 15～21 (8日)	厚生省 文部省科研費 総合研究班	WHO	カリキュラム プランニング	(大学) 10 (病院) 10	5 (8*1)
3	1977. 1. 10～17 (8日)	厚生省 文部省科研費 総合研究班	WHO	カリキュラム プランニング	(大学) 20 (病院) 20	9 (1)
4	1977. 12. 18～24 (7日)	厚生省 日本医学教育学会	WHO	教育評価	(大学) 14 (病院) 14	5 (2*2)
5	1978. 12. 4～11 (8日)	厚生省 日本医学教育学会	WHO	教育評価	(大学) 14 (病院) 14	5 (3)
6	1979. 12. 15～21 (7日)	厚生省 文部省	日本医学教育学会 医学教育振興財団 WHO	教授方法	(大学) 14 (病院) 14	5 (5*2)
7	1980. 12. 8～14 (7日)	厚生省 文部省	日本医学教育学会 医学教育振興財団 WHO	教授方法	(大学) 15 (病院) 15	6 (3)
8	1981. 12. 13～18 (6日)	厚生省 文部省	日本医学教育学会 医学教育振興財団 WHO	カリキュラム プランニング	(大学) 20 (病院) 20	7 (2)

\*1 コンサルタント中2名はシドニー RTTC より派遣（期間中）

\*2 コンサルタント中1名は WHO 本部研究員の短期参加。他に事務員（秘書）数名が毎回参加

についてははじめは厚生省が主で、当時の文部省科研費の医学教育に関する総合研究班が加わり、3年を経た。その後第4、5回は上記研究班が終了したので日本医学教育学会が負担して行ったが、第6回からは医学教育振興財団が設立されて、その所管の文部省が厚生省とともに主催に加わることになり、現在に及んでいる。

後援および協力については最初から WHO が終始後援となっているが、実質的に第1、2回はシドニー RTTC より2名ずつ（うち1名は同一人）のコンサルタントが全期間を通じて参加、指導した。しかしその後は直接の参加はなく、随時の短期参加をみたり、また非公式の連絡などが行われている。なお第6回からは日本医学教育学会と医学教育振興財団が協力機関となっている。

テーマについては全回を通じて教育技法の基本的なもの、すなわち広義の“カリキュラムプランニング”が特徴に取り上げられたといえるが、第4回以降はカリキュラムのなかでもとくに、“教育評価”（第4、5回）、および“教授方法”（第6、7回）がかかげられた。しかし期間中に行われる内容そのものは重点の置き方に変化を与えただけで、それほど大きく変わったことはなかった。

参加者の数は宿所の関係もあって制限せざるをえなく、はじめは計20名にすぎなかった。その後増員の希望に応じて第3回は宿所の全室を予約することができて、倍増の40名としたが、増員につれて講師側の負担過重ということもでてきて、次回からはふたたび計28名まで減員せざるをえなかった。しかし第7回は計30名に増加し

表 2 各大学，病院，学会などで催されたワークショップ

機関名	期 日	参加者数	備 考
旭川医科大学	1975. 8. 23—25	41	
	1976. 8. 20—21	39	
	1977. 7. 27—28	24	
	1979. 8. 1	33	
山形大学医学部	1977. 10. 1— 2	20	
自治医科大学	1978. 8. 11—13	17	
	1979. 8. 31—9. 1	22	
	1980. 8. 22—24	16	
	1981. 8. 21—23	23	
筑波大学医学専門学群	1974. 11. 23—25	32	
	1975. 7. 30—8. 1	36	
	1976. 7. 31—8. 2	44	
	1977. 7. 30—8. 1	83	
	1978. 7. 15—17	63	
	1979. 7. 27—28	41	
	1980. 7. 25—26	46	
防衛医科大学	1978. 8. 12—13	29	
	1980. 8. 5— 6	25	
千葉大学医学部	1976. 8. 20—21		
帝京大学医学部	1981. 8. 1— 2	49	
同上付属病院	1981. 3. 14—15	27	看護婦対象
順天堂大学医学部	1975. 8. 31—9. 2	30	
	1976. 8. 29—31	30	
	1977. 8. 6— 7	29	
	1978. 8. 3— 5	24	
	1979. 8. 3— 5	28	
	1980. 8. 29—31	23	
	1981. 8. 31—9. 1	24	
慶応義塾大学医学部	1977. 8. 12—14	22	
	1978. 8. 19—21	20	
	1979. 8. 24—26	21	
聖マリアンナ医科大学	1979. 3. 3, 3. 10	36	1週間隔2回
信州大学医学部	1978. 6. 24—25	20	
	1979. 7. 27—28	25	
岐阜大学医学部	1977. 7. 21	38	
浜松医科大学	1975. 1. 25—25		教官の80—90%参加
滋賀医科大学	1976. 12. 16—17	29	
	1977. 9. 5— 7	28	
	1978. 9. 4— 5	37	

機 関 名	期 日	参加者数	備 考
兵庫医科大学	1980. 7. 22—25	23	
	1981. 7. 29—8. 1	25	
鳥取大学医学部	1981. 9. 5—6	26	
島根医科大学	1978. 8. 18—29	32	
	1979. 7. 29—30	22	
福岡大学医学部	1978. 5. 13—14	31	
	1978. 10. 20—21	29	
	1979. 11. 24—25	39	
	1980. 11. 15—16	57	
久留米大学医学部	1977. 8. 30— 9. 1	32	
	1978. 8. 24—26	40	
	1980. 8. 28—30	53	
	1981. 7. 23—25	48	
佐賀医科大学	1980. 8. 1— 2	56	
	1981. 7. 22—23	111	
長崎大学医学部 (医学教育制度懇談会)	1976. 10. 9—11	19	長崎中央病院共催
武蔵野赤十字病院	1977. 8. 26—28	21	
	1980. 8. 30—31	22	
京都第一赤十字病院	1980. 8. 17—19	21	看護教育
神戸市立中央市民病院	1981. 9. 12—13	31	
国立長崎中央病院	1978. 8. 10—12	24	} 地域医療計画
	1979. 8. 4— 7	25	
	1980. 8. 7— 9	30	
	1981. 8. 8—11	30	
立正佼成会病院	1976. 2. 27—29		
日本医学教育学会	1976. 5. 27—28	38	評価：イリノイ大講師
日本耳鼻咽喉科学会	1981. 1. 22—24	59	学会新人教育
	1981. 8. 21—23	70	認定医教育

てさしたる不都合もなく行うことができた。その結果第8回(1981年12月)にはふたたび計40名(大学関係20名, 研修病院関係20名)の参加が可能となった。

講師はつねにディレクター1名, タスクフォース4~8名が任命されたが, コンサルタントは上記 WHO 関係は別として, 1~6名が適宜の時期と期間(多くは1泊2日), 委嘱によって参加した。

### 3. 医学教育開発ワークショップ

上に述べた「医学教育者のためのWS」を6回続けた

翌年(1980年)の8月に, 第1回の「医学教育開発WS」が同じく富士教育研修所で行われた。このWSの目的は参加者を第1回から第5回までの上記のWS終了者に限り, 彼らがすでに修得した能力をさらに拡充し, かつ応用能力を増強して, わが国に適した医学教育の開発を目指したものであり, 言葉をかえれば従来のWSのフォローアップと, 今後のWSのあり方についての改善策をもつことを兼ねたものである。

主催, 協力および後援は第6, 7回の上記WSと同じであり, 1980年8月23—26日の3泊4日間, 大学関係

者および研修病院関係者各12名の参加者，講師4名，事務局3名で行われた。

テーマは一応，“臨床実地教育”とされたが，内容のねらいは参加者が各自の教育実践場におけるカリキュラムと問題点を持ち寄り，お互いの実情を踏まえた討議によって，より良いプログラムを作成して持ち帰ることにおかれた。参加者はすべてWS経験者であるために，効率よい討議が比較的短期日の間に展開されて，所期の目的は概ね達成されたものと思われた。また将来の全国的規模のWSのもち方についても有益な示唆が得られた。

なおこのWS準備を始める前に，参加資格者全員にアンケートを発送し，過去における彼らのWSで獲得した知識・技術の利用度，WS資料の利用度，各自機関における医学教育の改善についての活動状況，各自機関におけるWSの開催，今回のWS企画に関する意見や希望，および参加希望の程度を詳しく尋ねた。その返答は今回のWSおよび将来のWSのもち方などに大きな参考となった。

#### 4. 各医科大学，研修病院，学会などにおけるワークショップ

これは2.項に述べた全国的規模のWSとは別に，多くはそれに参加した者が中心となって各自の機関で催されたTTWSである。多くは短期間なので“ミニWS”，または全国的なものに反響するという意味で“エコーWS”とも呼ばれるもので，1977年までに開かれたWSは前回の白書に記されている。

しかしその記載には不備の点もあるのでそれらを追加し，さらに1978年以降現在までのものをまとめて表2に示した。そこにみるように，各大学で1974年以降催されたWSは計55回(21大学)，参加人員1,800名以上を数え，さらに病院，学会を合わせた合計は67回(28機関)，参加人員2,200名以上となる。

なお本文中で紹介した各WSのさらに細部については，医学教育12巻6号(1981年)の特集“医学教育のためのワークショップ”を参照されたい。

\* \* \*